校異源氏物語・すゝむし

夏ころはちすの花のさかりに入道のひめ宮の御ち仏ともあらはし給へるくやうせさせ給このたひはおとゝの君の御心さしにて御ねんすたうのくともこまかにとゝのへさせ給へるをやかてしつらはせ給ふはたのさまなとなつかしう心ことなるからのにしきをえらひぬはせ給へりむらさきのうへそいそきせさせ給ひけるはなつくゑのおほひなとのおかしきめそめもなつかしうきよらなるにほひそめつけられたる心はへめなれぬさまなりよるのみ丁のかたひらをよおもてなからあけてうしろのかたにほ花のまたらかけ奉りてしろかねのはなかめにたかくこと　くしきはなの色をとゝのへて奉り名かうにからの百部のくのえかうをたき給へり阿弥陀仏けうしのほさちをの　く白たんしてつくり奉りたるこまかにうつくしけなりあかのくはれいのきはやかにちいさくてあをきしろきむらさきの蓮をとゝのへてかえうのほうをあはせたる名かうみちをかくしほゝろけてたきにほはしたるひとつかをりにゝほひあひていとなつかし経は六道の衆生のために六部かゝせ給てみつからの御持経は院そ御てつからかゝせ給ける是をたにこの世のけちえにてかたみにみちひきかはし給ふへき心を願文につくらせ給へりさてはあみた経からのかみはもろくてあさゆふの御てならしにもいかゝとてかむやの人をめしてことにおほせこと給てこゝろことにきよらにすかせ給へるに此春のころをひより御心とゝめていそきかゝせ給へるかひありてはしをみ給人　くめもかゝやきまとひ給けかけたるかねのすちよりもすみつきのうへにかゝやくさまなともいとなむめつらかなりけるちくへうしはこのさまなといへはさらなりかしこれはことにちんの花そくのつくゑにすへて仏の御おなしちやうたいのうへにかさらせ給へりたうかさりはてゝかうしまうのほり行かうの人

　くまいりつとひ給へは院もあなたにいて給ふとて宮のおはしますにしのひさしにのそき給へれはせはき心ちするかりの御しつらひにところせくあつけなるまてこと　くしくさうそきたる女房五六十人はかりつとひたり北のひさしのすのこまてわらはへなとはさまよふひとりともあまたしてけふたきまてあふきちらせはさしより給て空にたくはいつくのけふりそと思ひはかれぬこそよけれふしのみねよりもけにくゆりみちいてたるはほいなきわさなりかうせちのおりは

おほかたのなりをしつめてのとかに物の心もきゝわくへきことなれはゝはかり
なききぬのをとなひ人のけはひしつめてなんよかるへきなとれいのものふかゝ
らぬわか人とものようゐをしへ給宮は人けにおされ給ていとちいさくおかしけ
にてひれふし給へりわかきみらうかはしからむいたきかくしたてまつれなとの
給きたのみさうしもとりはなちてみすかけたりそなたに人　くはいれ給しつめ
て宮にも物の心しり給へきしたかたをきこえしらせ給ふいとあはれにみゆおま
しをゆつり給へる仏の御しつらひみやり給もさま　くにかゝるかたの御いとな
みをもゝろともにいそかんものとは思ひよらさりしことなりよしのちの世にた
にかのはなの中のやとりにへたてなくとをおもほせとてうちなき給ひぬ
　はちす葉をおなしうてなと契をきて露のわかるゝけふそかなしきと御すゝ
りにさしぬらしてかうそめなる御あふきにかきつけ給へり宮
　へたてなくはちすのやとをちきりても君か心やすましとすらむとかき給へ
れはいふかひなくもおもほしくたすかなとうちはらひなからなをあはれと物を
おもほしたる御気色なりれいのみこたちなともいとあまたまいり給へり御かた
　くよりわれも　くといとなみいてたまへるほうもちの有様心ことにところせ
きまてみゆ七そうのほうふくなとすへて大かたのことゝもはみなむらさきのう
へせさせ給へりあやのよそひにてけさのぬいめまてみしる人は世になへてなら
すとめてけりとやむつかしうこまかなることゝもかなかうしのいとたうとくこ
との心を申てこのよにすくれ給へるさかりをいとひはなれ給てなかきよゝにた
ゆましき御ちきりをほけ経にむすひ給ふたうとくふかきさまをあらはしてたゝ
いまのよのさえもすくれゆたけきさきらをいとゝ心していひつゝけたるいとた
うとけれはみな人しほたれ給ふこれはたゝしのひて御ねんすたうのはしめとお
ほしたることなれとうちにも山のみかともきこしめしてみな御つかひともあり
御す経のふせなといとゝころせきまてにはかになむことひろこりける院にまう
けさせ給へりけることゝもゝそくとおほししかとよのつねならさりけるをまい
ていまめかしきことゝものくはゝりたれはゆふへのてらにをき所なけなるまて
所せきいきをひになりてなん僧ともは帰けるいましも心くるしき御心そひてはか
りもなくかしつきゝこえ給ふ院のみかとはこの御そうふんの宮にすみはなれ
給なんもつゐのことにてめやすかりぬへくきこえ給へとよそ　くにてはおほつ
かなかるへしあけくれみ奉りきこえうけ給はらむことをこたらむにほいたかひ
ぬへしけにありはてぬ世いくはくあるましけれとなをいけるかきりの心さしを
たにうしなひはてしときこえ給つゝこの宮をもいとこまかにきよらにつくらせ

給ひみふのものともくに　くのみさうみまきなとより奉る物ともはか　くしき
さまのはみなかの三条の宮のみくらにおさめさせ給又もたてそへさせ給てさま
　くの御たから物とも院の御そうふんにかすもなくたまはり給へるなとあなた
さまの物はみなかの宮にはこひわたしこまかにいかめしうしをかせ給あけくれ
の御かしつきそこらの女房のことゝもかみしものはくゝみはをしなへて我御あ
つかひにてなといそきつかうまつらせ給ける秋ころにしのわたとのゝまへ中の
へいのひんかしのきはをおしなへてのにつくらせたまへりあかのたなゝとして
そのかたにしなさせ給へる御しつらひなといとなまめきたり御弟子にしたかひ
きこえたるあまとも御めのとふる人ともはさるものにてわかきさかりのもこゝ
ろさたまりさるかたにて世をつくしつへきかきりはえりてなんなさせ給けるさ
るきをいにはわれも　くときしろひけれとおとゝの君きこしめしてあるましき
ことなり心ならぬ人すこしもましりぬれはかたへの人くるしうあは　くしききこえいてくるわさなりといさめ給て十よ人はかりのほとそかたちことにてはさふらふこのゝにむしともはなたせ給て風すこしすゝしくなりゆく夕暮にわたり給つゝむしのねをきゝ給やうにてなをおもひはなれぬさまをきこえなやまし給へはれいの御心はあるましきことにこそはあなれとひとへにむつかしきことにおもひきこえ給へり人めにこそかはることなくもてなし給ひしかうちにはうきをしり給ふ気色しるくこよなうかはりにし御心をいかてみえたてまつらしの御心にておほうは思ひなり給にし御よのそむきなれはいまはもてはなれて心やすきになをかやうになときこえ給そくるしうて人はなれたらむ御すまひにもかなとおほしなれとおよすけてえさもしひ申給はす十五夜の夕暮にほとけの御まへに宮おはしてはしちかうなかめ給ひつゝねんすし給わかきあま君たち二三人花たてまつるとてならすあかつきのをと水のけはひなときこゆるさまかはりたるいとなみにそゝきあへるいとあはれなるにれいのわたり給てむしのねいとしけうみたるゝゆふへかなとてわれもしのひてうちすんし給ふ阿弥陀の大すいとたうとくほの　くきこゆけにこゑ　くきこゑたるなかに鈴虫のふりいてたるほとはなやかにおかし秋の虫のこゑいつれとなき中にまつ虫なんすくれたるとて中宮のはるけきのへをわけていとわさとたつねとりつゝはなたせ給へるしるくなきつたふるこそすくなかなれなにはたかひていのちのほとはかなきむしにそあるへき心にまかせて人きかぬおく山はるけきのゝまつ原にこゑおしまぬもいとへたて心あるむしになんありける鈴虫は心やすくいまめいたるこそらうたけれなとの給へは宮

大かたの秋をはうしとしりにしをふりすてかたきすゝむしのこゑとしのひやかにの給ふいとなまめいてあてにおほとか也いかにとかやいておもひのほかなる御ことにこそとて

心もて草のやとりをいとへともなをすゝむしの声そふりせぬなと聞え給てきんの御ことめしてめつらしくひきたまふ宮の御すゝひきをこたり給て御ことになをこゝろいれ給へり月さしいてゝいとはなやかなるほともあはれなるに空をうちなかめて世中さま　くにつけてはかなくうつりかはるありさまもおほしつゝけられてれいよりもあはれなるねにかきならし給ふこよひはれいの御あそひにやあらむとおしはかりて兵部卿の宮はたり給へり大将のきみ殿上人のさるへきなとくしてまいり給へれはこなたにおはしますと御ことのねをたつねてやかてまいり給いとつれ　くにてわさとあそひとはなくともひさしくたえにたるめつらしき物のねなときかまほしかりつるひとりことをいとようたつね給けるとて宮もこなたにおましよそひていれたてまつり給うちの御まへにこよひは月のえんあるへかりつるをとまりてさう　くしかりつるにこの院に人　くまいり給ときゝつたへてこれかれかんたちめなともまいり給へりむしのねのさためをし給ふ御ことゝものこゑ　くかきあはせておもしろきほとに月みるよひのいつとても物あはれならぬ折はなき中にこよひのあらたなる月の色にはけになをわか世のほかまてこそよろつ思なかさるれ故権大納言なにの折　くにもなきにつけていとゝしのはるゝことおほくおほやけわたくし物の折ふしのにほひうせたる心ちこそすれ花とりの色にもねにも思ひはきまへいふかひあるかたのいとうるさかりし物をなとの給ひいてゝ身つからもかきあはせ給御ことのねにも袖ぬらし給つみすのうちにもみゝとゝめてやきゝ給らんとかたつかたの御心にはおほしなからかゝる御あそひのほとにはまつこひしう内なとにもおほしいてけるこよひはすゝむしのえんにてあかしてんとおほしの給御かはらけふたはたりはかりまいるほとにれんせいゐんより御せうそこあり御せんの御あそひにはかにとまりぬるをくちおしかりて左大弁式部大輔又人　くひきゐてさるへきかきりまいりたれは大将なとは六条のゐんにさふらひ給ふときこしめしてなりけり

雲のうへをかけはなれたるすみかにもゝのわすれせぬ秋の夜の月おなしくはときこえ給へれはなにはかりところせきみのほとにもあらすなからいまはのとやかにおはしますにまいりなるゝこともおさ　くなきをほいなきことにおほしあまりておとろかさせ給へるかたしけなしとてにはかなるやうなれとまいり給はんとす

月かけはおなし雲井にみえなからわかやとからの秋そかはれることなる事
なかめれとたゝむかしいまの御ありさまのおほしつゝけられけるまゝなめり御
つかひにさか月たまひてろくいとになし人　くの御車したいのまゝにひきなを
しこせんの人　くたちこみてしつかなりつる御あそひまきれていて給ぬ院の御
車にみこたてまつり大将左衛門の督とうさいしやうなとおはしけるかきりみな
まいり給なをしにてかろらかなる御よそひともなれはしたかさねはかり奉りく
はへて月やゝさしあかりふけぬる空おもしろきにわかき人　くふえなとわさと
なくふかせ給なとしてしのひたる御まいりのさまなりうるはしかるへきおりふ
しはところせくよたけゝきゝしきをつくしてかたみに御らんせられ給ひ又いに
しへのたゝ人さまにおほしかへりてこよひはかる　くしきやうにふとかくまい
り給へれはいたうおとろきまちよろこひきこえ給ねひとゝのひ給へる御かたち
いよ　くこともならすいみしき御さかりの世を御心とおほしすてゝしつかな
る御有様にあはれすくなからすその夜の歌ともからのも山とのも心はへふかう
おもしろくのみなんれいのことたらぬかたはしはまねふもかたはらいたくてな
むあけかたにふみなとかうしてとく人　くまかて給六条の院は中宮の御方にわ
たり給て御物語なときこえ給ふいまはかうしつかなる御すまひにしは　くもま
いりぬへくなにとはなけれとすくるよはひにそへてわすれぬむかしの御物語な
とうけ給はりきこえまほしうおもひたまふるになにゝもつかぬみのありさまに
てさすかにうゐ　くしくところせくも侍てなんはれよりのちの人　くにかたか
たにつけてをくれゆく心ちしはへるもいとつねなきよの心ほそさのゝとめかた
うおほえ侍れはよはなれたるすまひにもやとやう　くおもひたちぬるをのこり
の人　くの物はかなからんたゝよはし給なとさき　くもきこえつけし心たかへ
すおほしとゝめて物せさせ給へなとまめやかなるさまにきこえさせ給れいのい
とわかうおほとかなる御けはひにてこゝのへのへたてふかう侍しとしころより
もおほつかなさのまさるやうにおもひ給へらるゝ有様をいとおもひのほかにむ
つかしうてみな人のそむきゆく世をいとはしうおもひなることも侍りなからそ
の心のうちをきこえさせうけたまはらねはなに事もまつたのもしきかけにはき
こえさせならひていふせく侍ときこえ給けにおほやけさまにてはかきりあるお
りふしの御さとゐもいとようまちつけきこえさせしをいまはなにことにつけて
かは御心にまかせさせ給御うつろひも侍らむさためなきよといひなからもさし
ていとはしきことなき人のさはやかにそむきはなるゝもありかたう心やすかる
へき程につけてたにをのつからおもひかゝつらふほたしのみ侍るをなとかその

人まねにきほふ御たうしんはかへりてひか　くしうおしはかりきこえさする人もこそ侍れかけてもいとあるましき御ことになむときこえ給をふかうもくみはかりたまはぬなめりかしとつらうおもひきこえ給ふ宮す所の御身のくるしうなり給らむありさまいかなるけふりの中にまとひ給らんなきかけにても人にうとまれたてまつり給御なのりなとのいてきけることかの院にはいみしうかくし給ひけるをゝのつから人のくちさかなくてつたへきこしめしけるのちいとかなしういみしくてなへての世のいとはしくおほしなりてかりにてもかのゝ給けん有様のくはしうきかまほしきをまをにはえうちいてきこえ給はてたゝなき人の御有様のつみかろからぬさまにほのきくことの侍しをさるしるしあらはならてもおしはかりつたへつへきことに侍りけれとをくれしほとのあはれはかりをわすれぬことにて物のあなたおもふ給へやらさりけるかものはかなさをいかてようひきかせんひとのすゝめをもきゝ侍りて身つからたにかのほのほをもさまし侍りにしかなとやう　くつもるになむおもひしらるゝこともありけるなとかすめつゝその給ふけにさもおほしぬへきことゝあはれにみ奉り給ふてそのほのをなむたれものかるましきことゝしりなからあしたの露のかゝれるほとは思ひすて侍らぬになむもくれんかほとけにちかきひしりの身にてたちまちにすくひけむためしにもえつかせ給はさらむ物からたまのかんさしすてさせ給はんもこの世にはうらみのこるやうなるわさなりやう　くさる御心さしをしめ給てかの御けふりはるへきことをせさせ給へしかおもひたまふること侍りなからものさはかしきやうにしつかなるほいもなきやうなる有様にあけくらし侍りつゝ身つからのつとめにそへていましつかにとおもひ給ふるもけにこそ心をさなきことなれなと世中なへてはかなくいとひすてまほしきことをきこえかはし給へとなをやつしにくき御身の有様ともなりよへはうちしのひてかやすかりし御ありきけさはあらはれたまひて上達部ともまいり給へるかきりはみな御をくりつかうまつり給ふ春宮の女御の御有様ならひなくいつきたて給へるかひ　くしさも大将のまたいと人にことなる御様をもいつれとなくめやすしとおほすになをこのれせいゐんを思ひきこえ給御心さしはすくれてふかく哀にそおほえ給院もつねにいふかしう思ひきこえ給ひしに御たいめんのまれにいふせうのみおほされけるにいそかされ給てかく心やすきさまにとおほしなりけるになん中宮そ中　くまかて給ふこともいとかたうなりてたゝひとの中のやうにならひおはしますにいまめかしうなか　くむかしよりもはなやかに御あそひをもし給ふなに事も御心やれる有様なからたゝかの宮す所の御ことをおほしやりつゝをこなひの御心すゝみにたるを人のゆるしきこえ給ましきことなれはくとくのことをたてゝおほしいとなみいとゝ心ふかう世中をおほしとれるさまになりまさりたまふ